

群 教 セ	G09 - 02
	平 28. 261 集
	英語一中

自分の思いを即興的に伝え合える生徒の育成

——小中のつながりを意識したコミュニケーション活動を用いて——

特別研修員 山田 章恵

I 研究テーマ設定の理由

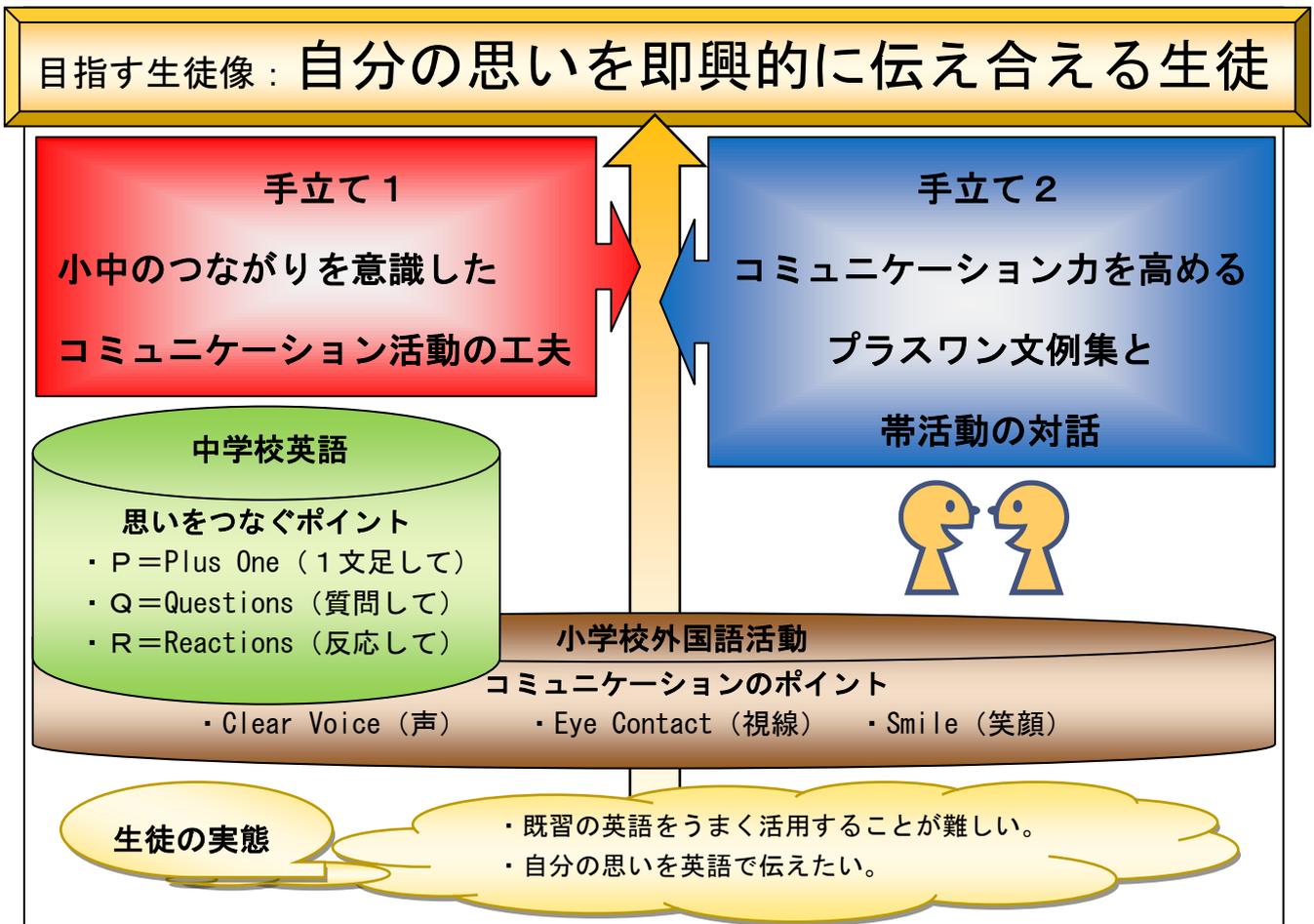
国際社会に生きる日本人として、相手を尊重しつつ自分の思いを伝えられるコミュニケーション能力が求められている。文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」では、2020年度東京オリンピック・パラリンピックを見据え、小学校5・6年生で外国語が教科化され、中学校でも授業を英語で行うことや、理解力や表現力を高めることが必要となる。

生徒の英語学習の実態を考えると、基本文や単語を身に付けてもうまく活用することが難しく、自分の思いを十分に伝えられないなどの問題点が挙げられる。それらの改善を目指し、授業では言語活動の機会を多く設定し、生徒が英語を使う時間をできるだけ多く確保していきたい。

所属校は、連携型小中一貫教育に取り組んでいる。ほとんどの生徒が9年間共に学ぶ環境にあることを生かし、外国語活動の学習を英語の学習につなげていくことができる。小学校で音声中心に英語に慣れてきたことを踏まえ、中学校でも音声による活動から始めて文字による活動へ進めていきたい。また、小学校の自分の思いを伝える段階から、中学校では相手の思いを聞いて反応したり、更に知りたいことを質問して答えたりと、思いを伝え合う即興的なやりとりへと高めていきたい。そこで、上記の通りテーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

既習の英語を活用し、言葉をつなぎながら、自分の思いを即興的に伝え合う力を身に付けるため、次の二つの手立てを毎時間の授業で取り入れ、スモールステップで積み重ねることにより力を高めていく。

手立て1 小中のつながりを意識した コミュニケーション活動の工夫

連携型小中一貫教育の特徴を生かし、外国語活動から英語へのつながりを意識したコミュニケーション活動を工夫した。小学校の外国語活動では、三つの「コミュニケーションのポイント」(Clear Voice, Eye Contact, Smile)に重点をおいている。中学校でもそれらを意識したコミュニケーションを続けるとともに、自分の思いを伝えるだけでなく、相手の思いを受け入れてそれに対して自分の感想や意見を言ったり、もっと知りたいことを質問したりと、三つの「思いをつなぐポイント(PQR)」(Plus One, Questions, Reactions)を取り入れた。思いを伝え合うやりとりのトレーニングを積み重ね、即興的に伝え合う力を身に付けることを目標にした。

手立て2 コミュニケーション力を高める プラスワン文例集 と 帯活動の対話

プラスワン文例集は、即興的なやりとりに便利な文を集めたものを作成し、生徒がコミュニケーション活動をする上での手助けとした。「相手の英語を理解するための文」「自分の思いを英語で表現するための文」「相手意識を高める文」に分かれ、70個の文で構成した。本時の活動で重点をおく文を練習したり、生徒が自分で必要な文を選択して活用したりできるようにした。「コミュニケーション力をより高める文」としたスペースには、生徒が教科書の本文などから使っていきたいと思う文を付け足していき、100個の文を集めたオリジナルの文例集にすることにした。

帯活動の対話は、一つの話題でペアまたはグループで行う。そのとき、プラスワン文例集の文や既習の英語を適切な場面で積極的に使うため、「思いをつなぐポイント(PQR)」を意味するP、Q、Rと書かれた三つのカードを持ち、話すときにカードを示してタイミングを図る。毎回の授業で継続して行うことで、コミュニケーションへの関心・意欲が高まり、思いを伝え合うことに慣れる。そして、既習の英語や即興的なやりとりに便利な文が身に付き、思いを伝え合う力が高まると考えた。1分間のやりとりから始め、少しずつ時間を延ばし、3年生では3分間のやりとりができるようにすることを目標にする。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- プラスワン文例集を用いて蓄積してきた便利な文をコミュニケーション活動で活用することができ、英語のやりとりをつなげようという意識が強くなった。
- 帯活動の対話練習を毎時間継続して行ったことにより、ペアやグループでの英語のやりとりに慣れ、既習事項の定着を図ることができ、コミュニケーション力が高まった。
- 小学校での「コミュニケーションのポイント」に引き続き、中学校での「思いをつなぐポイント」を意識したことで、即興的なやりとりをつなげられた。
- 外国語活動での学びを確認してから新出事項に取り組みせることにより、生徒は学びのつながりが分かって安心して学習に取り組み、学習の深まりも感じるようになった。

2 課題

- 既習事項の定着が不十分だったり、英語でのやりとりにまだ苦手意識があったりして、思いを十分に伝えられない様子も見られる。英語を使う練習を積み重ね、自信を持って取り組みたい。
- 即興的なやりとりを目標にしているが、事前に使う文を確認したがる生徒もいる。文ではなく単語のメモを助けにやりとりする習慣を付け、即興的にやりとりする力を付けさせたい。
- より即興的に伝え合える生徒の育成を目標に、長期的な練習の積み重ねが必要であり、今後も継続して指導していきたい。

実践例

1 題材名 「PROGRAM 6 “A Work Experience Program”」 (第2学年・2学期)

2 本単元(題材)について

本題材は、職場体験で経験したことや考えたことを英語で伝え合う会話と職場体験を経て将来に向けて考えていることについての英語のスピーチで構成されている。所属校の生徒も9月に職場体験を行い、経験したことや考えたことを英語で伝え合う良い機会になる。そして、将来の夢についての英語のスピーチでは、自分の考えを伝えたいという生徒の欲求を十分に満たすことができると考える。

新出言語材料として不定詞を学び、生徒は自分のしたいこと、行動の目的、何をするためのものかなどを伝え合うことができるようになる。これまでは、主語と述語(動詞)そして目的語の語句を並べた単純な文が多かったが、主語が不定詞を含んだ長めの語句になったり、不定詞で動作の目的を付け足したりすることで、より詳しいことを伝えることができるようになる。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想して実践した。

目標	<ul style="list-style-type: none"> ○職場体験で経験したことや考えたことを即興的な英語のやりとりで伝え合うことができる。 ○職場体験で経験したことや将来についての考えを英語でまとめ、発表することができる。 ○不定詞を含む文のしくみを理解し、自分のしたいこと(名詞的用法)、行動の目的(副詞的用法)、何をするための物(形容詞的用法)かを表現できるようになる。 	
評価 規準	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・したいことや目的などを伝え合う活動に意欲的に取り組むことができる。 ・職場体験で経験したことや考えたこと、将来の夢について、進んで伝えることができる。
	外国語の表現の能力	<ul style="list-style-type: none"> ・不定詞を用い、「～したい」こと、「～するために…する」こと、「～するための…」を表現することができる。 ・職場体験や将来の夢について、即興的なやりとりで伝えることができる。
	外国語の理解の能力	<ul style="list-style-type: none"> ・不定詞を用いて話されたことや書かれたことを理解することができる。 ・職場体験や将来の夢について、即興的なやりとりで伝えられたことを理解することができる。
	言語や文化についての知識・理解	<ul style="list-style-type: none"> ・不定詞を含む文に関する知識を身に付けている。 ・日本と外国の職場体験やインターンシップなどへの理解を深める。
過程	時間	主な学習活動
課題 把握	第1時	本題材を見通して課題をつかむ。 不定詞の名詞的用法を含む文を用い、「～すること」と伝えられることを知る。
	第2時	Program6-1の本文を読み取る。 不定詞の名詞的用法を含む文を用い、「～したい」ことを伝え合う。
課題 追究	第3時	不定詞の副詞的用法を含む文を用い、「～するために…する」と行動の目的を加えて伝えられることを知る。
	第4時	Program6-2の本文を読み取る。 不定詞の副詞的用法を含む文を用い、「～するために…した」と伝え合う。
	第5時	不定詞の形容詞的用法を含む文を用い、「～するための…」と、物について説明を加えられることを知る。
	第6時	Program6-3の本文を読み取る。 不定詞の形容詞的用法を含む文を用い、「～すべきこと」を伝え合う。
まとめ	第7時(本時)	職場体験で経験したことや考えたこと、将来の夢について、インタビューをして伝え合う。
	第8時	職場体験で経験したことや考えたこと、将来の夢について、スピーチをする。 友達のスピーチを聞いて内容を理解する。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は、全8時間計画の第7時にあたる。生徒は、それまでに不定詞の三つの用法を学習し、教科書の本文の学習も終わっている。本時では、本文の対話を参考に、職場体験で経験したことや考えたこと、将来の夢について、インタビューをして伝え合う活動を行う。自分の思いを即興的に伝え合う機会になることが期待される。手立てを以下のように具現化した。

手立て1 小中のつながりを意識した コミュニケーション活動の工夫

生徒は、小学校6年生の外国語活動で、“I want to be ～.”の文を用いて将来の夢を伝え合う活動をしている。そのときに慣れ親しんだチャンツを文や単語をかえて口頭練習した。外国語活動を思い出させつつ、使える文や単語の数が増えたことを実感させながら、学習事項の定着を図った。また、小学校では、“What do you want to be?”の質問と答えを使ってインタビューをしたが、本時では、職場体験についてのインタビューを中心に将来の夢にまで話題を広げ、より多くのことを伝え合うことができるようになったことを実感させながら、即興的なやりとりに取り組んだ。

手立て2 コミュニケーション力を高める プラスワン文例集と帯活動の対話

プラスワン文例集の活用として、教科書の本文から付け足した“How was it?”を用いて職場体験の感想を聞き出した。また、帯活動では、“Last Weekend”の話題で対話をし、インタビューの活動で使うことが予想される、“What did you do?” “Did you enjoy it?”などの質問や、“Good.” “Sounds nice.” “Really?”などの反応の文を練習した。

4 授業の実際

(1) チャンツから即興的な対話への導入に関して

①基本文をチャンツで練習

⇒**手立て1** 外国語活動の教材“Hi, Friends!”のチャンツのリズムで、文や単語をかえたものを用いた(図1)。小学校でも使う「リズムボックス」に合わせ、クラス全体、列、一人ずつで、練習した。生徒は外国語活動で慣れ親しんでいたリズムをすぐ思い出し、授業中に繰り返し練習し、休み時間にも口ずさむ様子が見られ、基本文の定着が図れた。

Now! Everyone! Let's talk about dreams!
What do you want to be?
I want to be a teacher. To be a teacher,
I have a lot of things to do. I will study hard.
Yes! Yes!! Yes!!! Let's try.

図1 チャンツの文

波線部は本題材の基本文(不定詞を用いた文)、
□になりた職業名を入れる。

②帯活動で即興的な対話

⇒**手立て2** 対話をするときには、「思いをつなぐポイント」を意識するため、P、Q、Rを書いたカードを手を持ち、話すときに示す(図2)。1週間(4時間)は同じ話題で対話をし、1枚のワークシートに記録を残す(図3)。ワークシートは毎時間回収し、話せたことや聞けたこと、言いたかったけれど難しかったことなどを、教員がチェックする。アドバイスを受け、前回話せなかったことを次回話せるようになった喜びを感じられる生徒も多い。自己評価の総合満足度で見ると80%以上の生徒が回を重ねるごとに満足度を高め、意欲的に挑戦している様子が見られた。



図2 PQRカードを使って対話

PQRカードでタイミングよくつなぐ。

P(Plus One) = 1文足して

Q(Questions) = 質問して

R(Reactions) = 反応して

対話を振り返って自己評価。伝え合えたこと、伝えなかったけれど伝えられなかったこと、総合満足度など記入。

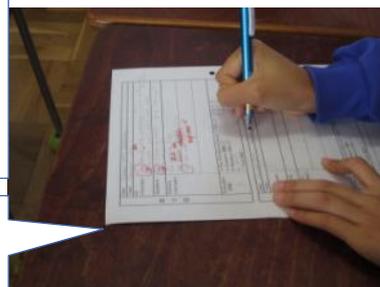


図3 活動ワークシートに記録

(2) 「職場体験（チャレンジウィーク）で経験したこと
や将来の夢を伝え合おう。」の活動に関して

① モデル対話を聞く

⇒**手立て1** 言語活動は、はじめにモデル対話が提示され、
場面や使われる表現を理解し、活動に入る、という手順で
行う。これは小学校の外国語活動でも共通に行われている
ため、生徒は慣れた手順で先を見通して取り組んでいる。
本時では、インタビューで使われる文を含んだモデル対話
により、インタビューをイメージできた（図4）。

② グループでインタビューする

⇒**手立て2** 4人1組で、順番に1人がインタビューを受
ける人になり、他の3人がインタビューをした（図5）。
既習の文を活用し、PQRカードも用いて（図6）“Really?”
“Oh, good!”などの反応を示す文を入れながら、やりとりを
つなげようとしている様子が見られた。

A: Where did you work?

B: I worked at Ono Elementary School
to know about teaching.

A: What did you do there?

B: I helped the teachers.

I had a chance to teach Kanji.

A: Really? How was it?

B: It was difficult but interesting.

A: What do you want to be in the future?

B: I want to be a teacher.

A: Cool! Why?

B: Because I like to teach.

図4 モデル対話の文

下線部は使いたい質問、波線部は本題材の基本
文、□はプラスワン文例集で身に付けた文。



図5 班の中でインタビュー

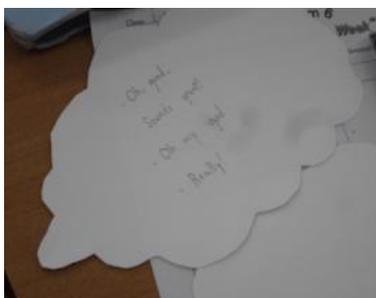


図6 PQRカードの活用



図7 クラスで情報を共有

(3) 分かった情報をクラスで共有する活動に関して

⇒**手立て2** 代表の生徒が分かった情報を発表すると、ALTが質問を
し、それに対して発表した生徒や体験した生徒が即興的に答える場面
を設けた。表情良く発表することができ、聞いている生徒はうなずき
ながら聞き、情報を共有することができた（図7）。最後に、インタ
ビューして分かったことやクラスで共有したことを英文にした。話せ
たことや聞いたことを文字にして書くことにより正確に使えているか
を確認し、基礎基本の定着を図った（図8）。

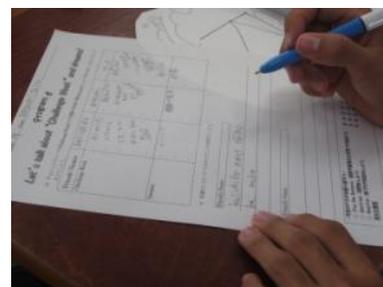


図8 まとめの最後に確認

5 考察

(1) 手立て1「小中のつながりを意識したコミュニケーション活動の工夫」について

外国語活動で使っていたチャンツを用いた口頭練習により、生徒は楽しみながら繰り返し練習し、基本
文を身に付けることができた。コミュニケーション活動は、外国語活動から共通の手順で行っているため、
生徒は先を見通して安心して取り組んでいた。また、三つの「コミュニケーションのポイント」に加えて
三つの「思いをつなぐポイント」を取り入れ、PQRカードを用いて意識したことで、即興的な対話に近づ
き、生徒も思いを伝え合えた達成感を味わうことができた。

(2) 手立て2「コミュニケーション力を高めるプラスワン文例集と帯活動の対話」について

プラスワン文例集を使って練習を積み重ねたことにより、生徒はコミュニケーションに便利な文を多く
身に付けることができ、コミュニケーション活動に意欲的に取り組んでいた。帯活動の対話練習も毎時間
続けたことにより、英語でのやりとりに慣れ、1分間は会話を続けることができるようになった生徒が増
えている。メインの言語活動でも、帯活動で身に付けた便利な表現を使って積極的に反応したり質問した
りし、即興的なやりとりにつなげることができた。